研究プロジェクト成果報告書

研究課題　　「国際交流作品展を軸とした本学の美術教育研究の発信と相互交流」

研究期間　　平成２７年度～平成２８年度

研究代表者　髙石次郎　芸術・体育教育学系（美術）教授

研究組織

| 氏　　名 | 所属・職名（専門） | 役　　割　　分　　担 |
|---|---|---|
| 髙石次郎 | 芸術・体育教育学系（美術）・教授（工芸） | 総括 |
| 阿部靖子 | 芸術・体育教育学系（美術）・教授（美術科教育） | 研究開発実践 |
| 洞谷亜里佐 | 芸術・体育教育学系（美術）・教授（絵画） | 研究開発実践, 国際交流･協定大学との連絡 |
| 安部泰 | 芸術・体育教育学系（美術）・准教授（デザイン） | 研究開発実践, 会場/展示 |
| 五十嵐史帆 | 芸術・体育教育学系（美術）・准教授（美術科教育） | 研究開発実践 |
| 伊藤将和 | 芸術・体育教育学系（美術）・准教授（絵画） | 研究開発実践, 会場/展示 |
| 松尾大介 | 芸術・体育教育学系（美術）・准教授（彫刻） | 研究開発実践, 国際交流･協定大学との連絡 |

上越教育大学研究プロジェクト　研究成果報告
「国際交流作品展を軸とした本学の美術教育研究の発信と相互交流」

## １　はじめに

平成元年からの数年間に台湾から多くの留学生が本学大学院美術コースで学んでいた。その修了生たちが台湾に戻って大学などで美術教育に関わっている。本学と彼らとの継続的な交流を背景にして、平成 23 年度に、台湾新竹教育大学と上越教育大学の美術コースの国際交流展覧会が始まった。これを機に双方の学生の留学や教員の招聘等の研究交流へ発展してきた（新竹教育大学・内蒙古民族大学・カレル大学は本学協定校）。

平成 27 年度上越教育大学研究プロジェクトに採択された本研究は、この展覧会を通した交流を基に、今日的教育課題と融合する形で、美術だからできる国際交流・教育研究の在り方を考える試みである。

内蒙古民族大学の包格日楽吐先生、チェコカレル大学のセドラーク・ミハル先生とマリエ・フルコヴァ先生におかれましては来日頂き、私たちとこれからの美術教育について語り合う機会を与えてくださった。また、通訳をやってくださった郷堀先生や社会コースの先生方そして様々な場面で協力いただいた学生たちによって貴重な相互交流ができた。

研究プロジェクト代表　髙石次郎

## ２　目的

今日、戦後の日本における教育の内容が抜本的に問われている教育改革の真っただ中にある。その議論の中で、教育系大学では、教科専門と教科教育の関係の再構築が求められているが、美術・図画工作科のような情操つまりメタ認知やノンバーバルに学びが位置する科目であっても、他教科と同様の問題を抱えている。それは、上手・下手や美・醜などの西洋の 19 世紀の美術からくる価値や一般的な大人が持つ美術に対する価値（評価）などに影響されているところが多いからだと思われれる。

そこで今日的な美術教育の存在意義を明らかにすることを目指して、本学美術科目群では平時の授業とは別に、平成 23 年度から行ってきた新竹教育大学との国際交流展を単に作品発表という場にとどまらず作品を通した研究発表の場に発展させることを計画した。言い換えるならば、自主的・臨床的な美術教育を展覧会という場を軸として国内外に発信し研究を推進することが、子ども・人間・学校・社会に貢献する美術教育の役割を問い直し、教育大学における固有の美術の有り方を明確にする「美術と教育が生きる力や学びの層で通底する教育実践学」の構築へとつながると考えたのである。

## ３　内容―概略

国際交流展は隔年で開催しており、平成２７年度前半は開催に向けて内容や参加大学や運送などの検討・準備を行った。平成２７年度後半に行われた研究活動の概略は以下のとおりである。

展覧会名称：『国際交流展 2016　A3 プロジェクト』

① 2016 年 1 月 25 日～2 月 10 日　　予告展示　「ぽてと」
② 本展に向けた陶芸ゼミで共同制作の企画・制作を始める。
2015 年 11 月～2016 年 2 月
③ 国際交流展（日本）　開催
2016 年 2 月 13 日～17 日，上越市ミュゼ雪小町ギャラリーC
出品：新竹教育大学（台湾），カレル大学（チェコ），内蒙古民族大学（中国），西北師範大学（中国），上越教育大学
④ 講演・研究発表会/協定大学紹介　開催
2016 年 2 月 22 日，本学共通講義室（音 201）
発表：ミハル氏（カレル大学），包氏（内蒙古民族大学），本学大学院生（上越教育大学）
⑤ 国際交流展巡回展（台湾）
2016 年 3 月 21 日～31 日，新竹教育大学　ギャラリー
本学教員 3 名が巡回展（台湾）に合わせて出張し、研究発表及び今後の美術教育や巡回展についての協議を行った。
⑥ 学会発表
2016 年 9 月 24 日 25 日，大学美術教育学会　北海道教育大学
本学教員 2 名が、研究発表（ポスター発表）を行った。
⑦ 講演会・研究交流　開催
2016 年 10 月 7 日，12 日
講師：マリエ・フルコヴァ氏（カレル大学）

４　内容―詳細
上記概要①～⑦の詳細は以下のとおりである。

■①予告展示　「ぽてと」

■②陶芸ゼミで共同制作の企画・制作
研究テーマ：「つくることに内在される関係性の再認識に向けて―陶芸制作を通して―」
作品名「素材と私たちの関係から No.4，No.8，No.12，No.16，No.18」

■③国際交流展（日本）
添付の図録参照

学長挨拶文
日毎に暖かさが増し春の足音が聞こえる頃となりました。
このたび第３回国際交流展の開催誠におめでとうございます。心よりお慶び申し上げます。

この国際交流展覧会は，A3 サイズの平面作品と一辺が 100mm の立方体サイズの立体作品による「A3 プロジェクト」と名付けた美術展覧会です。2012 年に国立大学法人上越教育大学と国立新竹教育大学（台湾）との国際交流企画として始まりました。今回３回目となる本展覧会では，本学協定校であるカレル大学（チェコ）と内蒙古民族大学（中国）に，西北師範大学（中国）が加わり，５大学による開催となりました。回を追うごとに広がる美術の交流の中で，作品の数のみならず，作品の質についてもさらに充実してきているように感じます。

上越教育大学の美術コースでは，つくる行為，見る行為，伝える行為に焦点を当てた様々な活動によって美術教育の可能性を追求しています。そして，それらの行為と制作者の「思い」が重なり，それぞれの作品に結実すると考えています。本展覧会は，美術を通してそれぞれの国で教育を学ぶ者教える者同士が，美術教育の新な可能性を作品として表現しています。

今日，グローバル化は日本社会においてあらゆる面で進行しています。そして，国際化する社会に対応するためには，私たち一人ひとりが世界の多様な文化を理解し認め合うことが最も大切です。

この作品を介した国際交流は，言語の壁を越え，異文化理解を深め，多様性を受け入れられる開かれた学びの環境作りに大きく貢献することでしょう。今後とも，このような美術の国際交流を足掛かりとして，世界中の子ども・学校・社会にある学びと平和に貢献できるように研究を進めていただくようお願いいたします。

結びとなりますが、本展覧会の企画運営をしていただいた皆様の熱意と御尽力に深く感謝申し上げます。

国立大学法人上越教育大学長
佐藤芳徳

■④講演・研究発表会/協定大学紹介

■⑤国際交流展巡回展（台湾）

**国際交流展-＜台湾国立新竹教育大学にて＞**

・期間
2016年3月21日（月）～4月22日（金）
21日（月）14:00　レセプション

・会場
竹師藝術空間

・参加大学
新竹教育大学　上越教育大学　内蒙古民族大学　カレル大学　西北師範大学　浙江師範大学
今回、新竹教育大学の協定校である浙江師範大学が参加しました。

＜レセプション内容について＞
参加者数-新竹教育大学教員６名、上越教育大学教員３名
　　学生約 50 名
学科主任の蕭先生の司会により進行されました。
１．交流展の開催挨拶と交流展の概要

２．林副学長先生のご挨拶

３．上越教育大学から洞谷の挨拶と松尾先生、伊藤先生自己紹介

・上越教育大学の学生自己紹介-謝さん、益子さん、泉さん、三輪さん
・上越教育大学に留学していた学生の自己紹介-林さん、朱さん、張さん、徐先生

４．研究発表
・陶芸共同作品の発表-泉さん、林さん（通訳）
・上越教育大学の図画工作授業についての発表-伊藤先生、林さん（通訳）

★レセプション終了後、美術の教室を見学した。その後事務室にて、上越教育大学で作成した今後の国際交流展についての資料を基に、上越教育大学の３名の教員と蕭先生、徐先生とで話し合いを行った。

■⑥学会発表
以下はポスター発表の内容である。
　　国際交流作品展を軸とした美術教育研究の発信と相互交流
・・・・・・・・・・

松尾　大介　　安部　泰　　髙石　次郎　　洞谷　亜里佐
伊藤　将和　　包　格日楽吐　阿部　靖子　　五十嵐　史帆

Matsuo Daisuke　Abe Yasushi　Takaishi Jiro　Doya Arisa
Itoh Masakazu　Bao Gerirato　Abe Yasuko　Ikarashi Shiho

[1]上越教育大学，[2]内蒙古民族大学
Key Words：国際交流，造形行為，プロセス

## 1. はじめに

上越教育大学芸術系コース「美術」と新竹教育大学藝術與設計學系(台湾)では，これまで３回の国際交流展覧会を開催してきた。

2011 年，新竹教育大学教員の徐子涵，李足新の提案により「A3 プロジェクト」と称する展覧会が始まった。本展覧会では A3 サイズの平面作品と 10×10×10 ㎝の立体作品[1)]を教員や学生から募り，上越市(日本)と新竹市(台湾)のギャラリー等で展示した。学生や市民は，言葉の壁を超える多様で固有な表現を実感したようである。特に学生にとっては，国の異なる同世代の今を見つめながら語り合う貴重な機会となった。そして，これを機に双方の大学への留学や教員の招聘等の交流へ発展した。さらに本展覧会は両大学の協定校にも広がり， 2013 年には澳門理工学院(中国)がゲストとして参加，2016 年にはカレル大学(チェコ)，内蒙古民族大学(中国)，西北師範大学(中国)を加え，５大学から 100 点以上の出品による展覧会を実現した。

近年のアジア諸国では，国際交流を目的とした展覧会が盛んである。その中で本展覧会の特徴を一つ挙げるならば，教育に主眼を置く大学を中心に行われている点である。したがって，本展覧会の継続には，上越教育大学の目標としても掲げられているような「21 世紀を生き抜くための能力[2)]」「アクティブラーニング」「グローバル」等の指標を視野に入れつつ研究・展開していく必要がある[3)]。

## 2. 美術教育研究の発信と相互交流

教員を養成する大学のあり方，さらに美術教育の存在意義も問われている今日，上越教育大学が培ってきた臨床的な美術教育を通じて国内外に発信[4)]することは，子ども・人間・学校・社会に貢献する美術の役割を広く問い直す契機となる。そして，国際的な視座による「美術と教育が生きる力や学びの層で通底する教育実践学」の構築は，上述した目標の推進に資するものであり，教育大学固有の美術のカリキュラム等の明確化にもつながるであろう。

そこで，2016 年の交流展では，作品展示にとどまらず，描く行為，つくる行為，伝える行為等，表現の主体的行為について問い直す場を設けた。交流展を計画するにあたり，参加大学のうち上越教育大学，内蒙古民族大学，カレル大学は，これまでの実践から，それぞれの課題を設定した。そして，それらの課題について，いかに取り組んできたのかを研究発表会で共有することとした。勿論，美術は制約から外され，自由に創作できる一面があり，表現された作品に対する見方も鑑賞者の自由である。しかし，発表される作品は，ささやかな動機から始まったとしても，趣味趣向では終わらない。表現内容のリアリティは，鑑賞される機会，いわば「他者との対話」をもって仕上げられるはずである。表現とは安易な押し付けではなく，「不断の問いかけ」であり，ゆえに「問い」の質が重要である。そのような問いを改めて共有すべく，自らの思考の変容過程を説明し，意見を交わすことは，造形行為の心的プロセスに内在する根拠や必然性を客観的に省察する高次の思考の醸成に資するといえる。

研究発表会で，上越教育大学陶芸研究室は「つくることに内在される関係性の再認識に向けて - 陶芸制作 - 」というテーマのもと，展覧会に向けて取り組んだ共同制作について発表した。制作の過程で状況的に変化する素材や他者との関係性について省察し，その相互行為的な関係性における教育的意義を確認した。内蒙古民族大学教員の包格日楽吐は，「地域に根ざした美術教育に関する研究」とし，内蒙古民族大学における近年のカリキュラム開発等について発表した。発展の著しい社会情勢の中，子どもの個性を育むために自然の風土と感性との結びつきを重視した美術教育の必要性が指摘された。カレル大学の教員であるセドラーク・ミハルは「公共空間のグレーゾーンにおけるオブ

ジェの重要性」について発表した。公共空間に向けた造形的行為から，社会に影響を及ぼしていくプロセスが提示された。

３．学生の学びにおける国際交流展

今回，作品制作から展示，研究発表会と一連の活動に参加した学生たちは，改めて表現する意味についての実感と認識を深める機会を得た。将来，子どもの前に立つ学生たちが，「なぜ図画工作や美術という教科があるのか。何のために教師は美術の授業に取り組むのか。」という質問を受け，答えに窮することもあろう。その際，重視すべきは，観念的なテーマよりも，言葉にし難い実感を確かめていく試行錯誤のプロセスである。そもそも異文化等，多様な価値観の理解に美術教育の意義を求めるならば，作品の端的な解説には，それほど意味があるようには思えない。それよりも，各々の造形行為に内在する，それぞれの世界に向かう際の複雑さと豊かさ，そしてそれに向き合おうとする意志を学生と共有したい。

来年は会場を移し，内蒙古民族大学で交流展を開催する予定である。学生の学びにおいて，交流展の活動と美術教育のカリキュラムとを往還させる実践学となるよう検証を重ねていきたい。

１)広く海外から多くの出品者を募ることに配慮した作品のサイズである。
２)上越教育大学第 3 期中期目標期間の主要目標の一つに「21 世紀を生き抜くための能力＋α」と記されている。そこでは，国立教育政策研究所が提案した「21 世紀に求められれる資質・能力」における「道具や身体を使う(基礎力)」「深く考える(思考力)」「未来を創る(実践力)」で構成される汎用的能力に加え，豊かな教養や使命感等，教員としての資質・能力を養成するための教育課程が目指されている。
３)本研究は平成 27,28 年度上越教育大学研究プロジェクトの一環である。
４)2016 年の交流展では，上越教育大学の授業を紹介する場も設けた。

■⑦講演会・研究交流

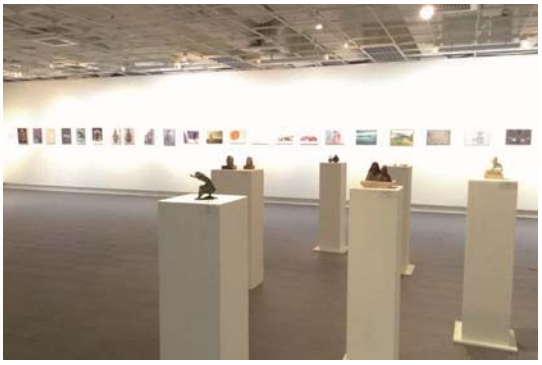
５　総括

国際交流展の作品展示やギャラリートークそして講演会に、カレル大学と内蒙古民族大学の教員が来日した。そこでは、本学学生や学外からも多数の参加者が来場し充実した講演・研究発表会が開催となった。そして、目的としていた「各教員が独自に行っている特色ある教育・研究の内容と教員・学生の作品を紹介し共有する」こと、及び「21 世紀型能力/アクティブラーニング」や「グローバル化」に貢献する」ことについて、当初の計画を達成できた。今後は、この国際交流展を軸としながらの美術教育の国際的交流を持続可能な形にしていくことが望まれる。

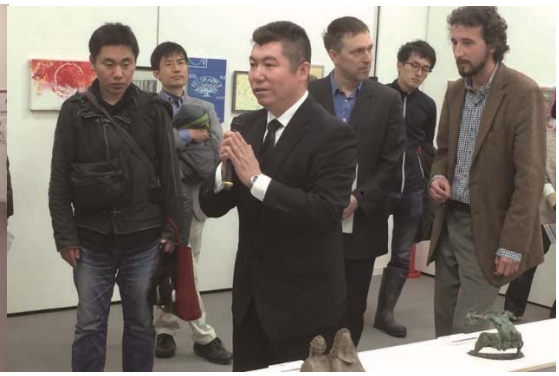
＊報告書（41 ページ・A4 版）を作成しました。ご覧になりたい方は、上越教育大学芸術系教育実践コース（美術）までお問い合わせください。

■参考資料

台湾--展示の様子



日本-展示の様子



日本-研究発表会の様子

# 2016 上越教育大学 新竹教育大学 カレル大学 内蒙古民族大学 西北師範大学 国際交流展覧会

あすとぴあ高田
ミュゼ雪小町　ギャラリーC　多目的室2

2016年2月13日(土)～2月17日(水)
※15日(月)は休館日

9：00～22：00（最終日は18：00まで）

A3Project
A3-size 100-mm Work Cube
Art Exhibition

**「A3プロジェクト」**とは，A3サイズの平面作品と一辺が100㎜の立法体サイズの立体作品による美術展覧会です。**上越教育大学**と**新竹教育大学**（台湾）との国際交流企画として2012年から始まり，3回目となる今展覧会では，それぞれの協定校である**カレル大学**（チェコ），**内蒙古民族大学**（中国），**西北師範大学**（中国）が参加し，5大学による開催となりました。
各大学にて美術・美術教育を学ぶ学生達と，研究・指導をおこなう教員達による作品展示です。
どうぞ御高覧ください。

**交通アクセス**

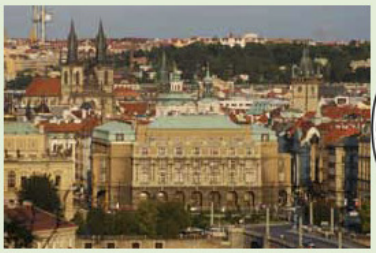
電車でのアクセス
北陸新幹線「上越妙高駅」徒歩。
えちごトキめき鉄道「高田駅」下徒。徒歩4分。

高速道でのアクセス
北陸自動車道「上越IC」または上信越自動車道「上越JCT」から高田駅方面へ。「あすとぴあ高田」駐車場をご利用ください。

〒943-0832
上越市本町5丁目4番5号
あすとぴあ高田5階

ギャラリートーク，研究発表会等の実施を予定しております。日時・場所等の詳細については，以下HPより御確認ください。

上越教育大学「美術」HP⇧
http://www.juen.ac.jp



本学の国際交流協定校　チェコ・プラハ・カレル大学教育学部

# マリエ・フルコヴァ先生

Ass. Prof. Marie Fulkova, Ph.D.
Deputy Head and PhD program leader
Department of Art Education, Faculty of Education,
Charles University in Prague

## 講演　美術教育における教育プロセスの図像化
## 生きているアールヌーボー
## 1900 年：関連性と文脈に関する研究

**第 1 回展覧会教育プログラムとその主要原理**

**10 月 7 日（金）16:30～17:50**

**美術棟4階・会議室 401**

**第 2 回展覧会での学生・研究者との協働**

**10 月 12 日（水）16:20～17:50**

**人文棟 104 号室**

主催：上越教育大学・美術系教育実践コース、社会系科研費研究会　連絡先：洞谷または下里

# 研究テーマ：つくることに内在される関係性の再認識に向けて　－陶芸制作－

教員：髙石次郎
陶芸ゼミ学生　大学院２年：大平修也　玉木澪　益子泉
大学院１年：嵯峨靖勝　嶺岸真紀子

## ●つくることについて

工芸の作品制作では，工程の中で素材が変化することをどのように捉えるかが作品の深みに影響を与えていく。従って，工程の中で起こる〈もの〉〈こと〉〈人〉との関係から素材や考えが変化していく些細な出来事に気付き，それらを，刻々と作品に反映させることが，素材の特性を生かした工芸作品，つまり「つくること」になるうえで重要となる。

## ●陶芸制作の内容

国際交流展の出品条件として，①100×100×100( ㎜ ) に収まる大きさである，②2 カ月で制作する，③外国へ輸送する，の３つが設定されていた。

３つの条件を踏まえた上で，今回の制作では，工芸の特性を生かしたつくり方を考えながら「共同で１つの作品を制作する→制作と作品について協議する（写真 1)」を繰り返した。この中で工芸における素材や考えの変化について意見交換し，素材と制作者の有効な関係をつくりながら作品がつくられていくことを体験した。

今回の陶芸制作では，合計で 19 個の作品をつくった。次に，制作の中で工芸特有の出来事があり素材と制作者の有効な関係がつくられたと考えられる作品（作品№5，6，7，8，9，12，19）を紹介する。

写真１　協議の様子

作品 No.1

作品 No.2

作品 No.3

作品 No.4

作品 No.5

## 場面 1

### 1−1　2015年12月9日午前（写真2）

乾燥中だった作品 NO.5 と NO.6 を見た陶芸制作の経験がある【高石】と【益子】は「ガラス粉の量が少なすぎて粘土同士がくっつかないかもしれない。例えくっついたとしても，粘土同士の接している部分がかろうじてくっつくだけなので，すごく脆い作品になるだろう。」と予想していた。

写真２　乾燥中の作品 NO.5

### 1−2　2015年12月9日午後（写真3）

【高石】が「ガラス粉の量が少なすぎて粘土同士がくっつかないかもしれないから，粘土の隙間をガラスで埋めた作品もつくろう。」と提案した。このアイディアを基に，作品 NO.7 と NO.8 の制作では，千切った粘土同士の隙間が埋まるようにガラスを詰めた。

写真３　乾燥中の作品 NO.8

### 1−3　2015年12月12日①(写真4)

作品 NO.5 と NO.6 を焼成し窯から出してみると，【高石】と【益子】の予想通り，粘土同士のくっつきが弱く作品の大半が崩れてしまった。一方で，私たちにとってはただの枠だった石膏ボードであったが，焼成によって石膏ボードには私たちの予想を超えた存在感が現れた。

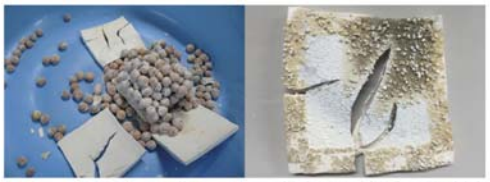


写真４　作品 NO.5（左）と石膏ボード（右）

### 1−4　2015年12月12日②

作品 NO.7 と NO.8 は，焼成の工程で石膏ボードが収縮してできた割れに，熔けたガラスが流れ込んだことで，石膏ボードからガラスと粘土を取り外せない状態になった。この出来事を焼成の工程における「石膏とガラスを組み合わせたことによる素材の特性」そして「人の手だけでは作り出せない表情」と捉え，この現象を積極的に，作品に取り入れることにした。

**場面１まとめ**

陶芸制作の経験者は，ガラスの量が少ないことを伝えると，未経験者の体験（失敗）を奪ってしまうことになると考え，見守っていた。そのことによって，他の４名は驚きや感動を伴い，素材と考えの変化を体感することができた。

作品 No.6

作品 No.7

作品 No.8

作品 No.9

作品 No.10

## 場面２

### 2−1　2015年12月15日（写真５）

焼成した作品 NO.9 は，丸めたロールペーパーの繊細な形が粘土によって表れていた。ロールペーパーの表情が細かく現れたことに驚きがあり，作品に取り入れたい要素の一つとなった。しかし，作品を見た【玉木】は「交流展出品のために輸送することから，作品の強度を上げる必要がある。」と言った。

写真５　作品 NO.9 の細部

### 2−2　2015年12月18日（写真６）

【玉木】は「作品の強度を上げるために釉薬を使おう。」と提案した。この提案からロールペーパーに釉薬のみをつける側（左）と，ロールペーパーに粘土のみをつける側（右）に分かれて作品 NO.12 を制作した。粘土の投入時「べちゃっ」と音が出ることに面白さを感じたため，力の入れ具合や角度を変えてわざと音を立てるような動きをした。

写真６　素材を勢いよく投入する様子

### 2−3　2015年12月24日

作品 NO.12 には，【嵯峨】から「焼成によって熔けた釉薬の部分が空洞になったが、作品全体の強度が増したので，安心して持てるようになった。」という意見があった。更に「釉薬が熔けた形に動きを感じる。」「石膏ボードの跡に色の変化が出た。」という新しい発見があった。また【高石】の「向きを変えて置いた時に釉薬の流れから起こる違和感が魅力的だ。」という意見から，作品の上下が決定した。

### 2−4　2015年12月25日

作品 NO.19 の制作では，【大平】と【益子】の「更に強度を上げるため，塊にした釉薬をロールペーパーで包み，その上に粘土をつけ，最後に粒状の釉薬をまぶしたらどうか。」という提案を採用した。しかし焼成を終えた作品を見て，【嶺岸】から「粘土と釉薬を何層にも重ねた影響で，ロールペーパーの繊細な形が消えてしまった。」という残念がる意見があり，作品の強度と繊細さの両立が難しいことを実感した。

### 場面２まとめ

強度を上げる必要から釉薬を加えたことで，釉薬の動いた形跡や石膏ボードの変色といった素材の変化に出会うことができた。更に，粘土量を増やしたことで，強度がある作品をつくることができたが，繊細な形が失われてしまった。制作を通して，強度と繊細さの両立が難しいことを実感した。

このように，素材のもつ意味が刻々と変化し，その変化に対応することで，作品が展開していくことを経験することができた。

作品 No.11

作品 No.12

作品 No.13

作品 No.14

作品 No.15

## ●陶芸制作を終えて

今回の陶芸制作を体験するまでは「作品をつくる」というと，制作者のはじめの「こうしたいという思い」を実現できたかどうかで作品の価値 ( 評価 ) が決まってくる面があると考えていた。しかし今回の制作を通して，5 人で共同制作することで，多くの考えが生まれ新しい発見と展開に出会えた。それは素材と考えの変化であるとともに作品と私の変化でもあった。

また今回の活動を終えて，学校の図画工作・美術科の授業で，子どもたちが語り合いながら刺激しあってものづくりをしている場面を思い出した。今回の経験は，私たちが教員として，今後，図画工作・美術科の授業で造形活動を行う際の，大切な視点になると思っている。

## ●発表者の感想

**髙石次郎**

考えや経験が異なる 5 人の仲間で作品を作るのは初めてのことであった。各人が自主的に役割を見つけ取り組んだ今回の制作活動は，教育に関わる彼らにとって，「教育のための美術 / 工芸のあり方」を考えるうえで，よい経験になったと思われる。

**益子泉**

自身の経験からある程度予測できる素材も他者と共同で制作する中で，まだまだ多くの発見があることを知りました。また，制作中は相手の動きが私の動きを偶然にもコントロールしていく面白さがありました。

**大平修也**

ものをつくる時は理論や理屈に従う必要があると漠然と思っていました。実践を通して見たり感じたりしたことを基に，理論や理屈の意味を実感しながらつくることで，学びの多い作品制作につながったと感じます。

**嵯峨靖勝**

人と人が関わり合うことと，素材の特性から生まれる発想や気づきは，これからの教育で重要な要素となるようです。今回の取組ではその要素を改めて確かめられたと感じています。今後の教育活動に生かしたいです。

**玉木澪**

今回の体験を通して，自分のイメージを作品として表すことだけでなく，作品をつくりかえることによって自身の作品のイメージもつくりかえるという工程そのものが，作品づくりと言えるのではないかと感じました。

**嶺岸真紀子**

初め協議する時間の必要性が分からずとてももどかしかったです。制作を繰り返すなかで，粘土の感触や投入時の音などに意識が向くようになり，後半は誰かと粘土で制作することを楽しめるようになりました。

作品 No.16

作品 No.17

作品 No.18

作品 No.19

## ●陶芸制作を終えて

今回の陶芸制作を体験するまでは「作品をつくる」というと，制作者のはじめの「こうしたいという思い」を実現できたかどうかで作品の価値 ( 評価 ) が決まってくる面があると考えていた。しかし今回の制作を通して，5 人で共同制作することで，多くの考えが生まれ新しい発見と展開に出会えた。それは素材と考えの変化であるとともに作品と私の変化でもあった。

また今回の活動を終えて，学校の図画工作・美術科の授業で，子どもたちが語り合いながら刺激しあってものづくりをしている場面を思い出した。今回の経験は，私たちが教員として，今後，図画工作・美術科の授業で造形活動を行う際の，大切な視点になると思っている。

## ●発表者の感想

**髙石次郎**

考えや経験が異なる 5 人の仲間で作品を作るのは初めてのことであった。各人が自主的に役割を見つけ取り組んだ今回の制作活動は，教育に関わる彼らにとって，「教育のための美術 / 工芸のあり方」を考えるうえで，よい経験になったと思われる。

**益子泉**

自身の経験からある程度予測できる素材も他者と共同で制作する中で，まだまだ多くの発見があることを知りました。また，制作中は相手の動きが私の動きを偶然にもコントロールしていく面白さがありました。

**大平修也**

ものをつくる時は理論や理屈に従う必要があると漠然と思っていました。実践を通して見たり感じたりしたことを基に，理論や理屈の意味を実感しながらつくることで，学びの多い作品制作につながったと感じます。

**嵯峨靖勝**

人と人が関わり合うことと，素材の特性から生まれる発想や気づきは，これからの教育で重要な要素となるようです。今回の取組ではその要素を改めて確かめられたと感じています。今後の教育活動に生かしたいです。

**玉木澪**

今回の体験を通して，自分のイメージを作品として表すことだけでなく，作品をつくりかえることによって自身の作品のイメージもつくりかえるという工程そのものが，作品づくりと言えるのではないかと感じました。

**嶺岸真紀子**

初め協議する時間の必要性が分からずとてももどかしかったです。制作を繰り返すなかで，粘土の感触や投入時の音などに意識が向くようになり，後半は誰かと粘土で制作することを楽しめるようになりました。

作品 No.16

作品 No.17

作品 No.18

作品 No.19

第3回 国際交流展 研究発表会
＜上越教育大学＞

研究テーマ：
つくることに内在される関係性の再認識に向けて
－陶芸制作を通して－

・日　時：平成28年(2016)2月22日(月)
・場　所：上越教育大学 音楽棟201教室
・発表者：芸術コース(美術)陶芸ゼミ

---

＜研究の目的＞

●陶芸制作の実践を通して、「つくること」における様々な関係性についての考察

①「つくること」において発生する様々な関係性の認識
　➡「つくること」に対する影響の考察

②共同制作と素材・技術・過程の意味について考察しながらの陶芸制作の実践
　➡有効性について提案

---

＜陶芸における「つくること」＞

---

＜陶芸における「つくること」＞

●陶芸の特性

素材の変化 ⇔ 反映 ⇔ こうしたいという思い

解釈

素材の特性を生かした陶芸ならではの作品

---

＜陶芸における「つくること」＞

はじめにもった「こうしたいという思い」 ← 固執しない！

↓

素材と制作者の有効な関係づくり

⇓

作品づくりの大きな要素

---

＜本研究での陶芸制作の方向性＞

---

＜本研究での陶芸制作の方向性＞

| |
|---|
| (1) 陶芸の特性を生かしたつくり方の探究 |
| (2) 国際交流展の出品条件への考慮<br>(①100mm圏、②2ヶ月で制作、③海外へ輸送) |
| (3) 共同制作の導入 |
| (4) 制作方法と作品についての考察 |

---

＜制作工程の概要＞

---

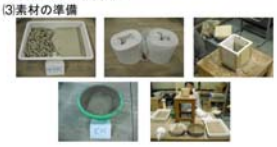
＜制作工程の概要＞
(1)協議A・制作方法の決定

---

＜制作工程の概要＞
(2)箱の制作

---

＜制作工程の概要＞
(3)素材の準備



---

＜制作工程の概要＞
(4)箱への素材の投入

---

＜制作工程の概要＞
(5)焼成準備

---

＜制作工程の概要＞
(6)焼成

---

＜制作工程の概要＞
(7)窯出し

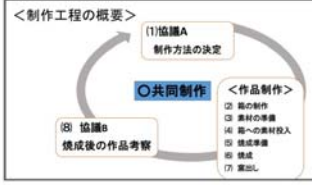
---

＜制作工程の概要＞
(8)協議B、焼成後の作品考察

次の作品について
(1)協議A、制作方法の決定

---

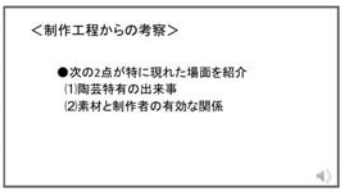
＜制作工程の概要＞

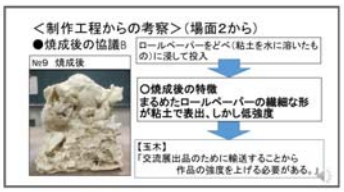


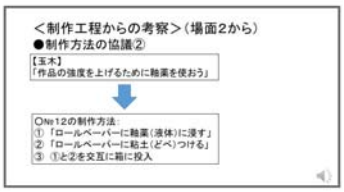

---

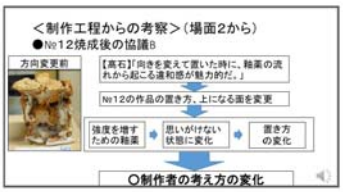
＜今回　制作した作品＞

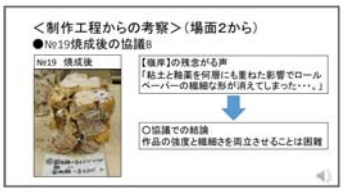
<制作工程からの考察>

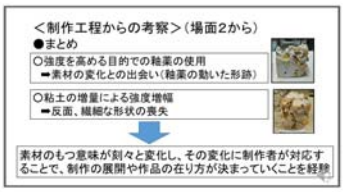


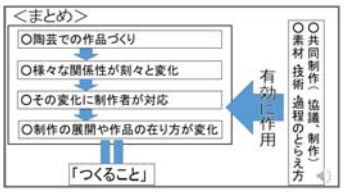
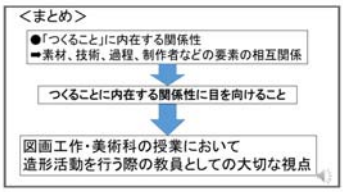








<まとめ>